

The SPIRAL

NOTE BOOK

No. 581-S

Noris Heyshulz
1992



Made Under One or More of The Following SPIRAL Patents
1516932-1942026-1985776-Other Patents Pending.

W-17

四月廿一日 一九四二年

天^{てん}入^りも氣^きを^を征^{せい}は^はる^る繩^{じゆ}な^なる^るん^んに^にて^て一^いと^と奥^{おく}野^の先生^{せんせい}
 牛^{うし}糞^{ふん}にあ^ある

羅扇山東京の曰来人書店では一冊五仙也
下曰来書翰の扱い書見りたと。

抑々推してよりなう。乙未、
 現在の治産日本
 人々、現在の故国外人の名目の下に

在平曰主人の生活は
贅は贅たるも心ある

お蔭に僕が出版した最初の詩集が、

五仙也。一竿長差半。手に這入つたあけ

戦争は文学とはかけ離れたもの

否と健は思ふに鼻等は新々

その文藝を生きたくう

僕^ハ新^ハく^ハ又^ハ三^ハに生^ハを捧^ハけ

五知本為

トメトの
50
なる
五エー
地
主
50
50
た

福山 4 ウリキと生捨る キアム、
13、

ハ、口へも訪書左妻如謂ふ

福島氏一藩井氏
之系也

四月二十三日 水曜日 朝金難おき
夜一月

朝から大風は午後になり風雨に雪り四時過ぎ
からは雪となった。おタニ雪はげしく
三四寸の雪は飾たーとユタリ人達も言う
若芽も若芽も雪の花 地は白銀に
塗られ 半月は美し
念光は未だかゝる観るわつた僕が生
暖に忘らわめ思出であらう。

失業者の金は未だーか とローカニ
行つた 歸リはスミフィンいかりの道で
フラットタイヤしふかすニ哩なり 何の
家か 火事になうとし 尾花か 燃え
めたのを咄見だ。
この煩悩車 悔おう夫はためた
火を消すことを知らぬ

雪。雪の中にも馬も草を求め歩い
る。
鯉と見た 幾千 幾万の 鯉はあかへし
あつたをみた

如月二十三日 雪降る

午後九時よりそのに外は明る。中野部殿等
同。たからみ。利。の時。回より。とし加。より。二時。回。早。の
紹江。熱。の。半。回。回。の。防。法。射。を。した。前。回。は。左。腕。
今日。は。左。腕。を。も。前。回。より。余。分。に。多。く。注。射。を。し。
本。を。と。り。右。手。の。白。血。を。失。不。位。痛。む。
。ア。ス。ハ。ウ。か。細。の。テ。ワ。キ。に。そ。つ。随。分。多。き。芽。生。
へ。る。う。い。あ。ち。こ。ち。に。芽。を。見。た。

。雪。は。昨。日。の。多。び。り。を。雪。朝。た。け。一。斗。た。午。後。は
三。寸。の。雪。も。消。え。失。せ。こ。ま。つ。た。

米。国。大。陸。の。一。角。だ。け。あ。る。暑。さ。害。さ。の。差。が
あ。り。い。と。多。く。風。雨。期。節。知。り。た。け。
雪。や。う。雨。や。う。雪。や。う。害。さ。つ。た。り。暑。さ。つ。た。り。

日。主。人。の。働。く。人。が。貧。し。く。一。と。足。極。性
主。人。執。事。も。お。も。ろ。い。水。も。電。気。も。便。利。な。か。
半。日。こ。う。回。り。い。は。働。く。者。が。多。く。こ。こ。に。あ。る
人。力。不。足。は。現。実。的。問。題。に。な。る。

加。州。の。日。主。人。百。姓。も。深。い。知。人。と。修。養。を。と。り。た。
た。う。い。う。新。鮮。な。野。菜。物。々。加。州。か。く。内。容。の。り。か。
ま。た。と。

四月二十五日 土曜日

ユタ州に(重)入るから既に二十回は出たやうに
何にもなかつた。けねど

人生の大轉機をうけた。最大變化があらた
な

日本と米國との戦争は、彼等を米國宛
の生命生活にも大害心をもちうた。

人生とはなにか、國とは人生、老いさ
るべき大問題、時と共に解決す
るだろう

今和見をのいて、きつておはな

今何にも言ひはけなうのだ。

羅府に居る。彼等は

パーカー博士の方に送る本をうけてた

京田君はどうなう

平賀さん、黒野先生、うう花美

雲野のママさん、牛井大

水、誰と

い誰と、あんなの私を思ひ出す

四月廿六日

午前時 午後零 午後三

小羊にわがが、あいて、皮を喰ひ、荒らさ、あて死に
 した人、たのを見た。生きた小羊にわがが、あくの、小羊始め
 2匹、惨めなのは、その小羊である。母を性一の類
 リに生きたる。可愛いの、小羊である。母をたす
 け、おや、たくなる。

羊の先を皆刈り取ればよいとフオスターが云ふ

鯉かてんちにつくるものとは思はなかつた

珍しくハニートートルから羅府より産物轉す。

者 杉島元一
又 妹井氏夫妻
加来る

同等に
石野師一も来り
十二日、去る

軍令²⁷ ~~幾~~4人 ~~幾~~3人 と 一生に ~~キ~~

ア
10
入
ル
3
4
3
エ
ソ
モ
長
、
—
2

同
同
七
五
一
七

生命は是れ全
仕事は是れ
自由は生来る

生活の目標はつてゐるし

戦等々平和を為さん。我等は知つたふ

二年 三斗 賣くものと
寛 悟也 及はたす

めう

五日と日

晴

・我々の生活を養つてゐるコーヒーの糖持きを
始まつた。

・これらに對し要害を及ぼさうとした。

・米国の軍需に於ける最後の足場を

これに完全になくした。

・戦争はこれからと米國で言ふが

我々は何とも言はず。 既に時分解決

するだろう

・エーヌキレコのカヤカにインディアンを来る

田舎に居るものと米政府のインディアン

手紙が来た。三十作にも及ぶとある

とし何もかもを曲げよう

・我々の他にアホー島や千島群島

に居るもの。 我々の力がある

・夜福やと云ふインディアンが

・前夜の夢に

四月二十九日

午前曇

夜晴

五月一日 月がまた

秋

いそせへの杉島へ松に代を新回する

ヤカクに入木う来るより良し自由で

手撮つて。といふ。

砂礫大堤をトイモを作ると。而し地つき

白人・日歩が余り好まなうらうら

加町の日歩が金もうけをするのを

つまり生きた食を行けることこの生活

の手を望まうらう

いそせへの白婦人が電話して

「回来の替小艦が来るのをいかにする

うー」と

山川をさかのぼる大平洋をさる一千里の

山の懐の山が奥人のかさつ水際地に

回来の替小艦が来る等

あけだましとてひり

日本郵船がイソリヤハレーの回来を殺

害事件としてお前を抗議をす

た由新聞を知り何とも知れないもの

冒二日 九月

その日

山の彼方に幸々や作らるる

我々が名ゆきま

誰れかの有るを尋ねて見せしめ

我々は山を越し谷を渡りて地の

未だか 幸々や作らるる

てこ

今も我々の世に

誰れかの有る

新さるる行方

未だか 幸々や作らるる

平を越す事と

来国のためにハートを食すこと

我々は遠く山を越す

我々が名ゆきま

生はもうけあふた日

友よ

冒二日 九月

晴

信は熱とホーリの注射をした。

信は熱は三日目に降りたが、胸が刺さるようになった

少し熱がある。面もな

かたこの二日流美さんには電話を断る

二日目をあきらめ、たが、話は一はりした

早、既に、常服も、車人、作らるる土地は

なくなった。

いま、竹も、生は、何もない

戦争が終るも、加那の国、地は

雨の草に、かゝるない

今、世が、車に、帰ることになった

日本は既に、とどろき、土地、国を、征伐

我は、早く、車に、なる、知、た、い。

ス、イン、今、信、を、信、オ、世、日、ま、は

日本に、信、の、一、と、新、田、に、ま、る、

今、分、ホ、ソ、エ、交、換、の、信、米、だ、ら、う

五月一日 曇

華加村のうらが 早 雨 である

日本の方 雨のツツ時だ

川邊 エリ村には 電 雪 やう 念 やう 霜 や

うい 交 候 不 順 ちう 砂 埃 大 現 った 名 を まく

の やう

午 前 中 に カレ ホ テ ー ン を 捕 へ 三 を ま っ た

失 業 係 役 金 は 未 だ 未 だ ナ

二 回 同 前 に 一 回 ナ 希 金 部 の 四 百 五 十 五 吊 五 拂

お と 加 村 保 佐 前 々 手 納 々 未 だ ナ 一 月 後

の 今 日 一 銭 の ヤ マ ヤ モ 未 だ ナ

村 外 の 日 事 (に は 未 だ 支 拂 け ず) し ろ 話 七

ある から ため 外 を 知 々 々

又 は 軍 命 に 従 っ 村 外 乃 乃 乃

日 本 軍 艦 一 が マ ー シ ャ ン 島 一 方 に 集 合 し

つ ぶ ぶ ぶ 新 軍 は 報 じ る

地 中 の 中 心 は 海 軍 等 の 呼 び は 何 も

解 け ぬ

五同三同
同
同
同

日壽

事が調ひ 誰々とは 誰氏は何處へ
 行つたやう—— 女を同胞は 四散してまた
 誰が何處で、もう雨のさぬすあてもなし
 これが比喩人生のいふあうか。

福山牛乳
白子

氣に來つて
ん待リかゝ
〜で在り

一生に一度と雖もまた今変化行
けるかと婦人さうな顔をする

イ・ト・ジャ・ヒ・マ・ヤ・ハ | 何処にも
行ける。

キヤの卵を。ろくせんが、食いさから敵さなくちや
なくぬ。この近處はキヤが多く 鶏えんも多い
と。17-47-1テンが 鉄を持ちて行きながら
話す。

「春夫さん、今日の私の誕生日だねー」

と夜になつて言ふ未だ一重も訃生口を
祝つた事はなつと。ソ子

昨日は兼つ詠上日。
夜あはく何もなし。

五回四

昔に 剣の徒の首をはぬれたと云て
見目覚めた。

この夢を叶にものた

源字の義ともは 定重、ヨイ、か、食に、く
き、取、か、さ、る、と、云、た、―― 加未代は、皆、四、部
だ。

首を、~~取~~は、ぬ、ら、れ、る、夢、は、と、う、云、こ、も、よ、く、な、り、。

今日は妻の誕生日だ。―― 妻は、愛、へ、る
贈物、一、持、を、ち、う、。

美保子は、い、か、か、を、買、つ、て、母、に、贈、る、と、い、ふ、
と、買、つ、て、は、出、掛、け、な、い、。

使は、心、を、と、る、外、に、な、い、。

天気が、晴、天、と、云、ふ、位、春、の、気、候、に、な、う、

と、云、つ、て、ある、 牛、の、糞、が、急、に、せ、り、始、め、た、

や、う、い、あ、る、

辛佐美、さ、か、う、金、魚、の、十、数、程、と、
赤、鴨、知、百、羽、来、る、と、云、な、つ、て、ある、。

五月五日 火曜日 晴夫

ムーおりの時、心持で解かぬ

羅商便りは、舟車武田四郎 長年比美
代等。

羅新の連中は多くはサナアニ行きうい
皆各前より番子の方へ早利リうい
武田君も一七四二の番子だと

つまり手組ではサニクアニ、目黒人キセラ(一七四二)
とあるなり

中印の
年比美人の方には、平利に付くらしい七日迄に
殆んど全計 幸知の目黒は移轉した。

玉屑の京田をたけが、美に返る

のんきに馬空を眺めて 金魚池を深(掘りたり)
木をまうたりして遊びた。

本日から砂礫の統制を始めた。

御米国の戦時財政はいよいよ本調子に入った

四戦はこれであらう

幾時つかくかはありはなし

五月七日 木曜日

晴

美保子が饒をやるから下、B.I.が来るのも
知れぬから注意するやうにとパーのワイフが
とりに言つたさうだと保子の妻が話す
馬鹿を言つて（饒又言ふ）

2+2=4は真理だ
美子が何を言ふと子供ながら使ふ事を
なすノ一娘だ。

保生に書札を持てけ言はぬ
僕の子供が冗談いふの文が下、B.I.に傳は
し話を知らぬと云ふ 僕は何の落度をも
たうにや。

馬鹿も半井休や言ふべきだ。

今日サエアミのう人とか手紙が来た
サエアミは半井休が何から何をよく
行きとていふからかとも良いうつ
半井休は女房曰ふ人かか死するやうな
事は快い事だ。
と云ふが、サエアミの（口）はさう

五月八日
金曜日

たふなりふか。知らぬか。聖運いけ。果や

なりと思ふ。戰を平する人に此の如きは

物の数に
もつて
命を
はらふ
ニイニク

の仕事のはどさ、思ひやれる。云、

今日はお町のサイ金魚を三斗と金

9 金魚が来た。

金魚の口を塞いで来るか
どうか。

久方 福山氏 公下 七区の 鯉を 手探 412

上 117
T_E。

等しく、
魚の
命を
生かす

[illegible]

あさしーうろろ

雲りともなまじい

カモの川をうきまゐりたうた

五介 物 アスハウリスをとうし事た

とつて
陰なきめ
能事
安生へる

乙未の甲寅の定一たるに
乙未の甲寅の定一たるに

如拙の
女亭
は
と
ふ

原田因15.9.1
南陽侯家方丈

五日の土曜日は曇り

朝、あんなにテテ振りをした。

やあ、ちいさいハートな仕事ではある

テテの取側の雑草をじゃぶじゃぶけり

取る。たかろ、白粉りたう、腰が痛く歩

け直る

うかう、じい、うかう、想やうする

い、達者な奴は仕事は出来ぬものか、

候、星にしろん、うしろも、春大士のも

うかう、

おめから来た金魚は大大大うーい

失、葉、留、金、の、来、た、う

ターキ、ヒヤキ、を、買、う、も、り、六、回、目

した、う、葉、木、の、こ、い、ろ、が、第、一、の、葉、木、の、こ

うかう、

おめから来た、お、た、一、仙、も、板、入、な、た、

早く、夏、を、傷、し、れ、秋、の、收、穫、を、得、る

冬、の、心、も、ノ、た、

五月十三
日曜
工木
取
ア、木
樹
雲

上々州のくアイカ市州に入
る。雪から雪た

LEE
Ran
と
Robert
Reese
に
連
れ
ら
れ
て
Idaho
州
の
一
千
四
百
萬
27

9 烟在見 12 行

千石の山田は産

麦尔 1423 busel 也弄了

ク
一
七
四
ヲ

千八百四十一年

一氣辛棒すれは二三乃は得る

出、今、賣、主、金、入、る

傳等には手か
ととかめ

途中イナカ、白人の大平好に交る

余中をシークした歴史の如く歌う

田 ^{could} ^{would}
 り ^い ^う
 や ^い
 う ^う
 る ^う
 先 ^い
 者 ^う
 達 ^う
 分 ^う
 給 ^う
 住 ^う
 一 ^う
 十 ^う
 頃 ^う
 入 ^う

アイホホに一人の日記を
とるというる

3145
burley
か
Idaho
falls
point
Preston
三
四
五
十
里
3

十月二十九日 霜 曇 雪

夜にふり雪人降りて来た。明朝の夕ツゴ
ーは凍りつめさながら。

日曜日迄降らなけり大分見合ふ
付く今一週目い仕事は終る

Topaz に camp から来た仕事人より云々
も小も下便きはまる家に住んでゐる

食料を買ふに何くにも自働事は無
自下人生と努力なつた労働と寒さ

と——戦争中の人生の苦しさ
感の事だろう。

戦争はとうなるか
米國は十月の半日を以て志士に

いはそうも戦争
ヒヤ人呼聲三行母體一、カキ

その他田を無くしてさうた。
未だ君より手紙が来る毎父をたて

戦争中、キャンプ生活た悲し状、まが

五月十三日 水曜日

日暮れ頃 僕と福山牛と妻と娘と
魚釣をしをたか フリ僕が 後の方
をより向くと タヌキ4匹なものを 樹の根元
をぬきしめる

オーイ 福山牛 タヌキ た
やあー ううんー ハーヤヤ

僕が皆おす方をすわー 見せさうさけり
えんしと下から 動く 樹の
おそくかつた。 福山牛、一匹
樹に登り 樹のうかつは 落した
なまーんだ ヤマアツ

大さけおしーさけと 帰った。

こゝへには 是をちもあゝるう
夜にたつて あうが来た。

天候 定まりなき 地うへある

何十年ぶり 悪天候うし

五月十四日 木曜日

コロン海軍 日本海軍の大海軍
がなごうと

船とこの国にあると敵国外人の地味にある
者は ちたすう 平和をいのりの

別に定まる事はない 天災は良う

のやう悪うやう 不安定の二条件は
ある。

皆ちさななつりにある

下の地の端には エートク、一つ(等)つたに
いある

福山代は、いふ外を地に見えた。 年々

と支持よく取つてゐたあつた、
美濃この生活はの人を、ある

半身働いて 半年は 冬の間を
父方 郷に アス、うを 撫に 行く。

蛇、た、し、来、た、
水蛇、た、さ、う、た、人、富、に、ま、は、た、う、う、

余は自分の力以上の何事をも創造せんと欲して
之に付あ一行く人も愛する

——
ヒツアラワースというは云ふ

これ加ニ一千年の余りにも激越な人生觀にもちろ
人生を切り用ひて社會にふつつかり、境遇を支えし
新らしい環境に身を投じ込まんとする人間
の希望ある生活にもある

人間は環境に支配される。ト。マハク又たか
唯物史觀の思想體系を築き上げた他、
衆も今の資本主義の世の中は必要に必要
あるにてもた

唯の諺も 惟心諺も、フム、の精神分
も、千ヤ、の心、宗教的良心をま
込まぬ、社會人としての人間生活は可能
ではないと思ふ。

フム、一歩を造り出すにも、
要である。

ミソを作った、人件を確保にするには
金持ちも、富めるも、必要であるやうに

五月十九日 土曜日

雨

Mr. Henry Roukney に会いに行く。玄倉の方から家へ

た隣りの兄弟の家庭は見もたつた。

全国から集まってきた人々をみる。水

の集い、こんなことが、命一つと思ふ。

定に日本橋あり、錦えん、スミ、4ノリツ、

ジャクヤク、おとうク。見事な花々を

ここにジャクヤクと来た。たいたものだ。

あり、園、おもと、ライラックとジャクヤク

の園、

我が家より、庭に Lilly Valley の咲くのは、おもしろい。

レイトから大坪、香年とその妻の父母の

家へ来る。代達は、そのおとくに

海軍員兵の、おとくに、おとくに、おとくに

らる。

大坪、香年、おとくに、おとくに

おとくに、おとくに、おとくに、おとくに

おとくに、おとくに、おとくに、おとくに

おとくに、おとくに、おとくに、おとくに

十月三日 曇天 夜雪

十時過ぎから雪は三寸続いた
未だ降り続いている 夜通し降り続い
たろう

三日かけ早かった 天候が今三日月良ふ
たら 僕等のタラギワカも出んだい
女らうに おしり事に雪にうつつし
了った。

雪の中の 畑仕事も 思ふと えむりする

歌あり 舞 緑も 冬 眠に 這入るだろう

日暮り 牧場川 ぬり 雪の 雪敷きに
たとか 町外り 世話役 になつたとか 言つて
ほこり顔にする 友人の手紙が来る
第リにも 人目が 楽楽 同い限り
ひはある

岸 踏ぬに 生命を 愛する 夢に 生きた
方々は 考へ ないさ。

明日は 仕事は 出来 ないだろう

十月五日 木曜日 晴

雪の降り止んだところ、朝八時過ぎ
頃、キヤーラーが来た。

早く豊清まで来たんだ。雪に埋ま
ったところを顔

馬車も泥をまきあてた

始め一団目もタワビをスリートで
候等は十人の人同くもたつたも
てはなつた。今はな。雪に埋ま
る事である

来た。雪の月曜日をかける予定である

ツラクタイに、来た。タワビも十
約五十人のヒークを出した。

馬五匹でも来た。タワビは
力がある。いかにおめりした所
で、上り、引く張りをあ

土手、おち、今、つた。五日、雪、キヤ
生、常、細、変、リ、を、あ、け、た。

五日二斗

十月七日

晴大

アフリカ十斗の粗知各々標まらーと

英米が報道する大成功である

この事業実であるならは

明日ハワグのシグ済む

馬鹿な場約をいれたもの

契

砂場大根の代事は

一英知十五噸トニ以上の収穫がなけ

ねは三分の一収入の契約では努力働

なうない

一英知に付き

(Aber.)

Thinning
Hoisting
watering
Topping
fertilising
肥料地

20
10
15
30
10

85 Hours.

働いたとも半五時
かかると五時
四十二時五十分かか

明斗は一時五十分以上であらう

そー一英知の収穫十五トンは平均し

わすれも無

結局大成功と人たのた

十月七日

曇

月曜

Super Beets
Tipping が済んだ

dark of 22 Acres から 69 臺出た。

本斗の働き収めである

もう本斗は足はやらぬと云う言

明日から働かぬと云う夫さん、財

収入の高は免に用も資金はbeesか

一斗の終り仕事である。

働くとbeesは苦勞なものである

毛唐の主人達は余り良くなかつた。

毛唐の主人の意見に過るない

人主合は良いか、主人と働きの関係

に於ては要する人格である

澤村にさへが見えた。明斗の計画が

粗然と一あつたから早く定めなくては

いかぬ。

握にきんかある百斗の畑をあげ念に

握にきんかある百斗の畑をあげ念に

握にきんかある百斗の畑をあげ念に

握にきんかある百斗の畑をあげ念に

握にきんかある百斗の畑をあげ念に

握にきんかある百斗の畑をあげ念に

十月九日 同曜日

併し加州式に植ふ木は、四十仙以上もえう_る
一葉加に二丁、三丁未だあつた。

久業保衛高に行つた。久業久今日から
 明日春にかけ始めます。由を話した。約三百里を
 冬に收入として加増。政令から裁きたり
 9た。それかもうへる金額である

十月十日 大晴り

遊んでやうな天気が晴れた。

「一片の雲もなうあー」と集居する
LAの一番寒い朝でも今朝は比較的
あたたかい」と談笑する

これ程に既に寒さ入、急に来た

冬の間には厚着を書きたく思ふ。

冬の間には身体を休めたく思ふ

冬の間には足(足)の冷たい事を止めたい

戦争はどうなるだろうか

日本は大東亜政策を発表した。

米国はアフリカにオニ戦線を張った。

戦争は中後十ヶ月に上院議定する
か発表し、どちらが勝つにせよと曰ふ

統制へ——米国の生活法に

戦争が止むと迫る

曰く、豊島、ギャス、ダイヤミート、コーヒ、その他

下のギヤをから来て、クランクを1回転中は
 佐々木は歩く、将臺は動く、尾巻を
 買ふ得ても、日暮をたづね、幕門をも
 何も手にこ入れず。
 湯に入る事をもあきら
 買物に所を歩くに、
 妻の白傷車
 であらう。

什物作 其如十頃とてその收穫
 には倍科にあらぬ 三升か 四月の
 日付から 食料の便から 着物
 等を買へば 一個月の滞在は無一文
 の 鐘房に還らねばならぬ 破目になる

幾千人の回廊が、
キヤッパの装束を
着た人々で、
回廊を
歩いている。

それより平和の努力待遇と待遇を得たのち
うゑに帝大節分は不敬遠近ある生活
の裡に不平を募り歸つた事である

光武殿御義、今日は休載記念日
た、五年前のこの日から、大井美保子
先生の小岩校も休まあい。

正統は乙未のうたゝと請ふる也

あつちで勝ちつゝある米國は、獨逸兵の食料を頼つゝ、英國兵のそれよりも遙かに人用する者多しといふ食料だといふ

キヤのミートや、公や、野サ希を評し、
敵の軍勢は能くは舌をまじあるうーッ

日本は資本の
Roh. Malt
か、股腹不足で輸出不能の
米国にとりた
るが故である

アムステルダム
・
フランクフルト
・
コペンハーゲン
・
オスロ
・
ストックホルム

うゝと云ふ。一と云ふも新しう能た

空を支配するよりも海を支配する、の、
義、情、才、の、た、つ、つ、要、件、に、あ、る

五月廿五日 大曜日 晴、夜曇

dish clean を終日働く (いじめる) を持つ Hand wash あり

百様の仕事は機械仕事以外はエライ
十百姓は又た大百姓の機械仕事の
戦時中 金を得たが来るだろう

太平洋戦争の日本人は今キカッて所々暗
たてたものだ

一月働いて11円、12月11円は10文の収入
ある、山原録は夫婦者、二人働いて10文、大
強に15文、最も夜金、住日、政府持
ちにはあるが!

美保子の大きな花、ははは

夜船が短かく、おるばかりである

時々仕事が出来なく、たてまつる

beets-
contract

たか
全
1/3

9meme
た

20 ac.

25 ac.

35 ac.

7 ac.

charley
fully
partly
Rec.

87 score た

五日三白水曜

曇り夜風

Beet's thinking も大坪先生達が始めるの心算へ了ると
福山氏に訊ねる

僕等は多々奮夫と共に ティンクリンの後見物
に行く、腰の痛やいやないいな学事たと云ふ
ティンクリンよりなやすりものだ。

海園から僕等の畑も *dining* 始める

social meeting の金は 買付日にクレイム 五分十の二十七
に来ただけ、今園は来なつ

加納り秋存のヤリかたはなごみなり。

買付日九園目経たは 三園目分とは
なり。

coal sea に大海戦、米国の勝利と謂ふ
金の新園目の事柄者相の議論は
天皇陛下の前で演説し
回来大勝利といふ。

近頃昨日加納をたつて 野山の如に来ると
今ところを去つてあるやう

五四年

十月二日

火曜日

曇 小風

自動車は青い日限りギヤス四匹をどうしやうも
なり乗リ廻すことはおろか仕事にも行けまいぞ
砂塵は一月一升コーにも制限された GAS MEAT もハイコレ
も余り無いからお買つて呉れぬ。

無くなる物が無くなる 金が多くなる 高くなる
次に来るものは何か。 々、恐ろものだ

スチーキングの スチーキング比事がある。と
田代氏が話を持て来る 田代氏身、 百未で七十五
、切り賃安い、 キヤナリー富社に契約して賣る
あうしり ものになるか どうかは判りしない
切るのは4本一回位と税困難ではなうしい。

夜になつた。又 ^{スモヤ} 雪を ^思 思はる。

風は寒く、土は凍りついて
モレアスの詩ではなにか

和達 人間の心の中にも 夢人
いま雪をばおはる

一九四三年十月二十日

豊崎

Brighton に保生等母原の一家族が移轉するといふ
その乳に行く 出来れば来月中に所のレイシモン
前に移轉したうと。

建設中に陸軍病院の道向である。小エリ字を
ニ軒合せて三軒族七人が住出もり。

その土地は我々の地方より二ヶ月から三ヶ月
春が早い 今日でも ^{あなはかり} ~~あなはかり~~ ^{あなはかり}

ブルガリア人の五千足 [●] うちの町だが陸軍は居
人々をわけて五人を入れた儘ソーラーから

病院にいて一人の人口が増える事だ。

保生は病院の前の道へ、土地だから
キリサカ屋はもうかると言ふ居る

松島さんかう家があとと回して来る

91 Highway 掘にさんかある デウエルから ^{トレン} ~~トレン~~ ^{トレン}
トニに行くまかり角のまう行ける左側の
園の半分地下にもくったセメタの小尾た。

steeds becom の仕事が決まる迄はあ

一九四三年十月二十四日 木曜日 曇り寒し

感謝祭

風無し

在米期間中、甚だめづまれなかつた點一ツ
さういふ感謝祭である。

收穫は悪く、生活費は無し。

失業保険金は来ず、何かどうして運

な事だつた。

戦争になつて三月には加増かうな増へ、デマの程
を道ねて来た佐々^は今日なく、傷に仕事はな
さうな者だつたから、秋の悪の毛織物もある

土方の親分生活と在米四十年回り来た。田代
氏が明日から、押の板を断る仕事をあけ
来た。まあ、何とかあるだろうと思ふ。

併し冬を支つる生活費が春夏秋の六ヶ月も
毎日傷んで、かゝる得なかつたといふ、現実甚に
は泣きだくなる。

傷つく、食へな^い世生活だ。

戦争、景気、食は、何と食へやう

十月二十七日 金曜日 曇

面白い仕事がある

柳の木を切つてヒキワステイタにするために

ヤナリリーから百本七十五仙の買ふとら

五仙を運賃に手取り七十仙

一日に五株位にはなるうーりか 冬の日には

如天交は半分のかなうたらう

保生達、はブリカに本月かに移轉す

用意をせよ

二十数英所の土地に、いさふをう合せん

七人が住ちつちりうー併し水を借るための

パイプを買ふに困る

場所には

如 R. D. Bugan 左 陸軍病院の前 右 11 Highway

R. D. Bugan 左 陸軍病院の前 右 11 Highway

年中 管事に困りはじめ

ぬし士地に、あつて、前に移轉

すうきうた。まあ安心た

一九四三 十一月三十日

各所一応が皆な修繕する

明後が最後とさうな

キアミハリーに未練は無うたうが金の無い
ソのと残品の別け前の少うなう未練
たう

坂本係生、タムハ人ハ人とも君の々々た
う明後は見物ものだ。その上に仕事キうろ
悪口屋揃うと来しぬる。

福山、伊集、清水、春夫、花も前年
明年の計画が不明だ

泊中、オヤノフに行きたうさうな

預金を出しぬが、未だに返事がなうし、

僕は新島と共同で明年一斗を
目指す心算で、定めには定めぬが、
美保の、岩、校、同、上、明春三月
になうね、向うは修繕出来ぬと思ふ

十月三〇

夜 雲に なる

自働車に乗本なり曰か途に來た。

タリヤの配給は蘭人を日車にうけつ木をか
う輸入の見込上なく 全米が明日かうあス
の統制だ。一週回やランては僕の仕事は
一週間十哩も走本ぬから 何處にも
来り回らぬ 仕事にも来本なくなる

柳木 切りとり面うつ仕事もヤスリンな
くはオヤンである

ヤンが生活の方か者多て安全であるやう
にも想へる 戦争がせれば 敵国人の生活
はつうかたである。

授受はスクリンクローに買ふやうである
とアフリカに英米軍が進軍したとい
ふ事は悪くなられた。

日本は長期戦の戦い
敗戦になつて来た

十五日

雪 朝から

日暮野(田)年になうとはする

朝から雪をキヤスを得る見込中云々

家に用が繁る

福山ヤが、山道もうづる金銀の宝庫に
する。

生涯に窮する冬が、始まつた

向中が、フォスターの向中の字が、保来の居宅に

鶴鶴〜来た。

お八人、へつし七人、お八に、半方、たう

妻のケウチン、傷も、たう、たう、あけた。

元々ウツには、通つたう

キマワとバーの土地は、一英、五井、から、二十五井

迄位、のし、た、といふ。角、大、坪、元、は

三十五井、ミチ、英、知、し、た、う、

イオ、タ、ヤ、し、は、beets、は、三、分、一、Tomatoes、は、半、分

半分、の、し、た、う、も、リ、う、

乙、ち、と、く、に、は、お、ン、と、来、ぬ、う、あ、

十有句 水曜の星

来る者は拒まず、去る者は追はず

保生達があつた後の世は静かな静かな

平和な家、安んじにたつた。

美保子の生後、夫心あるものに思ふ

娘のあはれ、娘らしく、純正、貞節に育つた。

なうめ、悪くして、つるく生、長き

なうめ、家、良に、神明に、ある

美保子の母に、小人殿の落し付いた家、

望ましくた。

福山君、春夫三君も、川、白、

る、其、加の、土地に、移、す、る、

牛、と、七、区、を、り、男、人、の、

る、性、だ、可、なり、妙、力、も、

福山、代、も、半、身、中、に、飛、

傷、き、む、し、や、な、日、市、は、

明、春、は、或、多、才、日、だ、

世、の中、は、変、り、た、う、

人、の、心、を

鉄、等、も、於、自、己、の、方、に、移、

十日

儼として 地の技を切らうとある

百本 千五仙の買子とて十仙運賃ハ千五

の手ありいあるか といつた 然るに判らな

ニ三串 一日に儼ければ幸ある

此等係儼ふから 金は来なつ

儼かない 儼かな金をもうと

儼して金を得る方がたの

今日も亦 雪である

この先き 寒さや思ふやう

真珠湾の大 艦を焚き出すさうだ

十日(日)午後 新聞が来な

ギヤスや 音に 来な

ノックス 徹底的には焚き

日軍軍が 知るを 敵する 點は未だ 秘

守る

十月九日 水曜日

夜寒

十ヶ所の轉住所に居る回春ノ總數の
人口ノ發表を末二カ

ホスト

一七〇九

ツラノ

一四四四

七ラノ

一三三三

ハート

九八〇

マナナ

九〇九

ロウハ

八二四

中ノ

七六九

ノ

七六六

ミニ

七五〇

クラナ

六三五

十ヶ所ノ回春ノ五人ノ一

夏珠湾の損害はその後の十ヶ所の米田の
損害より大なりと発表

戦艦カリフォルニア、ユタ、オクラホマ、
ハアヤニヤ、等々を回春と発表す

十月十日 木曜

子供の世界に於ては排他戦争もなすべし
 先づ 高層階級生徒會長に
 小林君の長男が 選出等也とある
 に當選したといふ 話を聞いたのみ

今日の娘の美保子が 中級生徒會
 に選出され 級長の生徒をさうな

生員と云ふのは 国境も異人種もないものらしい

世界大戦は どちらとも利ある
 勝ったと どちらとも言ひのる

英米はアフリカに 権はスクリンカーハル
 日本はソビエトに 権は戦後増大するものた

日本大企業と為るの とき 経済政策
 の結果は 本意である
 半国も大打撃をかうものた
 僅かに一歩の歩むる五 振る日本銀行

いさかはずにたがひあつた

てい

一キヤンチンにたがひあつた。これは昨日の三月の末に加州を離れて加州の北部に流れて

西生をたがひあつた。加州を生きていふ事だ。

事道に言へば、戦争が何となく自白してゐる。後には

エヤンチンに留まるが老いへてゐる。

或は浅はかた老いへてゐる。阿呆の一編をた

くもあつた。同時に各々下老いへてゐる。其

一エヤンチンにたがひあつた。其の地代

五姓は生活に人毛抜くをすには血を導きやういふあ

ふつ外に生きている。其の地代

一エヤンチンにたがひあつた。

キヤンチンの友人は、探るが心に長する

毎にキヤンチンに生きている。これは其の互性にな

た。老いへてゐる。其の地代

人キヤンチンにたがひあつた。

神は、人キヤンチンにたがひあつた。

神は、人キヤンチンにたがひあつた。

神は、人キヤンチンにたがひあつた。

神は、人キヤンチンにたがひあつた。

神は、人キヤンチンにたがひあつた。

神は、人キヤンチンにたがひあつた。

其

山あふく日記

其

其

其は、人キヤンチンにたがひあつた。

其は、人キヤンチンにたがひあつた。

其は、人キヤンチンにたがひあつた。

其は、人キヤンチンにたがひあつた。

其は、人キヤンチンにたがひあつた。

其は、人キヤンチンにたがひあつた。

其は、人キヤンチンにたがひあつた。

其は、人キヤンチンにたがひあつた。

其は、人キヤンチンにたがひあつた。

其は、人キヤンチンにたがひあつた。

其は、人キヤンチンにたがひあつた。

其は、人キヤンチンにたがひあつた。

其は、人キヤンチンにたがひあつた。

其は、人キヤンチンにたがひあつた。

其は、人キヤンチンにたがひあつた。

其は、人キヤンチンにたがひあつた。

其は、人キヤンチンにたがひあつた。

其は、人キヤンチンにたがひあつた。

其は、人キヤンチンにたがひあつた。

其は、人キヤンチンにたがひあつた。

三つ白々に

土籍信は船をくぐりきりたしと事

白くは葉をたけだり老に近き神まだ無き時をいふ

白くは魂をたけだり老に近き神まだ無き時をいふ

白くは

世を度るはありもふと云ふ事久し

正直一途に道を行くは事ある

白くは魂をたけだり老に近き神まだ無き時をいふ

月一言行の事ある事

我々は身の中に聲かに白くは魂をたけだり老に近き神まだ無き時をいふ

我々は身の中に聲かに白くは魂をたけだり老に近き神まだ無き時をいふ

我々は身の中に聲かに白くは魂をたけだり老に近き神まだ無き時をいふ

我々は身の中に聲かに白くは魂をたけだり老に近き神まだ無き時をいふ

我々は身の中に聲かに白くは魂をたけだり老に近き神まだ無き時をいふ

我々は身の中に聲かに白くは魂をたけだり老に近き神まだ無き時をいふ

我々は身の中に聲かに白くは魂をたけだり老に近き神まだ無き時をいふ

我々は身の中に聲かに白くは魂をたけだり老に近き神まだ無き時をいふ

十月二十三日 水曜

ヤシの山学校へ午後二時からリッパス

劇をするから 来て呉れと

美保子、友の秋

妻と二人で行く。

百人の生徒に三人の先生

半田、田舎、校たから 無理は

言うのみ 先生も等しいはなりなり

全師の生徒を役者一人にして

カカイーに控らる人たから

遠くの人男生徒が一人居ると

口まの美保子が言ふ

父兄姉 主として母親達から三十人

夢観に来た。

戦中 ながい。 天と教えるあは

降誕祭かびの土地心はもの静か

た。 今更に4中。

五回分

土月十四日 木曜 雨

柳の木を切る 金ハマスクリへの
贈送品の贈物にやう こそ目的で

二百の、船 切ったはよい

福山4のワリクが、ハインウエイ。横ッ

ハスクリヲ切めかるサにめめつて

大さあき。 ところまめくりになつて

遂に出るより出た。

か金はもうつた (ま拂人不在) 贈物は

買へる

遂にロースクリの 贈物は日建つとなつ

其に實に良く、~~其~~ 日事人の学に事

ち。 或は謂ふ白人 ~~其~~ 地主の當にのり

と而し 健は知る 教中が

其に日事人の学か 自己の地位の学か

白人地主の学か 目的あつてか

先日 健はフウラウーの佃をシヤヤし

やつたうに 言つたが、最近 地主は借地

士郎となつてゐる 誰がちがひ

吉野世帯 隣証案

稀く、晴れた隣証案にある

寒くつめたう朝が、あつたが、晴れた

午後になり、曇る。雲模様

泊りか買ふところ、ターキイ

先づ、無難に今日を送る

美人得る生むより

クリスマスツリーの無ク、クリスマスは

車身が、始めてある

戦いの線に生命を捨て、血を流す

想、おれ、夜にあり、妻と、皆に

夕餐の、年を、圖る

神に感謝する、まの、り

金銭の有無は、人生の、華に

あつた

朗明、偶々、こそ、百姓、努力、者

の、今、日、の、我、の、初、り、い、あ、う